**〔解　　説〕**安永元年（一七七二)大坂豊竹座初演。作者は竹本三郎兵衛、豊竹応律、八民平七。美しい人情を描いた世話物の代表作です。中でもお園のクドキ「今頃は半七様どこにどうしてござろうぞ」はよく知られています。元禄八年、大阪千日前での赤根屋（茜屋）の半七と美濃屋の三勝(さんかつ)が心中した事件が歌舞伎となり、二十五年を経た享保四年、紀海音が『笠屋三勝廿五年忌』という浄瑠璃を創作しました。その後更に笠屋を実説美濃屋にし、半兵衛やお園を配した『女舞剣紅楓』の筋を受け、発展させたものがこの作品です。上中下三巻に分かれ、下の巻の、「上塩町の段」が「酒屋の段」となります。

**〔あらすじ〕**大阪上塩町の酒屋「茜屋」に幼子を連れた女が酒を買いにあらわれ、子どもをおいて姿を消します。この店の息子半七は、お園という貞淑な女房がいるものの、以前から美濃屋の三勝という遊女となじみ、二人にはお通という子どももおりました。半七はふとした廓のいきさつで、人殺しの科人となってしまいます。、半七の父半兵衛は、一度は息子を勘当したものの、不憫に思い、代官所で息子の罪を引き受けて縄にかかります。

一方、お園の父宗岸は、半七の不行跡に愛想をつかし、一旦はお園を実家へ連れ戻したものの、お園が悲しみに沈んでばかりいるので、再び嫁として迎えてくれるように半兵衛に頼みに来ます。お園は夫に嫌われるのは己の至らなさからと、ひとり寂しく半七の身を案じます。

(一般社団法人　義太夫協会発行)

**酒屋の段**

跡には園が憂き思ひ。かヽれとてしもの、世の味気なさ身一つに、結ぼれ解けぬ片糸の、繰返したる独り言

「今頃は半七様、どこにどうしてござらうぞ。今更返らぬことながら、といふ者ないならば、舅御様もおに免じ、子までなしたる三勝殿を、とくにも呼び入れさしやんしたら、半七様の身持も直り御勘当もあるまいに、思へば〳〵この園が、去年の秋のひに、いつそ死んでしまふたら、かうした難儀は出来まいもの。お気に入らぬと知りながら、未練な私が輪廻ゆゑ。添ひ伏しは叶はずとも、おにゐたいと辛抱して、これまでゐたのがお身の。今の思ひにくらぶれば、一年前にこの園が死ぬる心がエヽマつかなんだ。堪へてたべ半七様、私やこのやうに思ふてゐる」

と恨みつらみは露ほども、夫を思ふ真実心なほいや増さる憂き思ひ。

「明日はとほから父様に、また連れられて天満へ去に、半七様のひよつとした、はかない便りを聞くならば、思ひ死にに死ぬであろ。とても浮世は立たぬ覚悟、嫌われても夫の内、この家で死ねば後の世の、もしや契りの綱にも」

と最期を急ぐ心根は、余所の見る目もいぢらしゝ。

かゝる哀れも知らぬ子の、泣き声に目や覚しけん、一間を出でて

「乳飲まう。乳が飲みたいおば〳〵」

とお園が膝に寄り添ふ子の、顔見てびつくり

「ヤそなたは美濃屋のお通ぢやないか。こヽへはどうしておぢやつた」

と不思議ながらも抱き上ぐれば、半兵衛、宗岸、母親も、一間のうちを転び出で、

「アヽコレ〳〵嫁女、いその心。障子のうちで聞くたびに、拝んでばつかりゐたわいの。礼云ふこともたんとあれど、心のせくはこの子のこと。美濃屋のお通と言はしやつたは、半七と三勝の」

「アイ、お二人の中に出来た、お通といふはこの子ぢやわいな」

「ヤア〳〵親父殿。聞かしやつたか」

「ヲヽ聞いてゐる。がそのまたお通を、なんで捨て子にしてこちのうちへ越したぞ。コリヤ訳があらう。、懐かどこぞになんぞカウ書いたものでもないか、はやう尋ねて見や」

と云ふうちに、わくせき明ける守り袋、うちよりばらりと落ちたる一通。取る間遅しと封押切り

「ヤ何ぢや。書置のことと書いてある」

「ヤア〳〵コレ〳〵嫁女。そなたのよい目でちやつと読みや〳〵」

「アイ〳〵ナニ〳〵『契りて親子となる。父の御恩は山よりも高きとの世の教へ、わが身にもへをり候へども、その御恩も得送らず、ならぬ義理にからまれて、心にもあらぬ不孝の罪、御赦し下されたく候。わけて母様の御養育』アヽコレ申しお前様のことでござります。ようお聞きなされませえ」

「ヲヽよう聞いてゐます、よう聞いてゐますわいなう」

〽聞いてゐるさの障子より、洩れ出づる月は冴ゆれど胸の闇

「エヽ時も時と隣の稽古。そしてそのあとはなんと書いてあるぞ」

「アイ『わけて母様の御養育、海より深き御恵み、親父様の御機嫌悪しい時には、蔭になり日なたになり幾千万のお心遣ひも、泡と消えゆくわが難儀。人を殺せし身となり候へば、思ひもうけぬ御別れ』エヽそんならやつぱり半七様は」

「オイナウ嫁女。善右衛門を殺しました、善右衛門を殺しましたわいなう」

「ハア」

「あの善右衛門といふ奴は、大抵や大かたの悪い奴ぢやないわいの。あんな悪者でも喧嘩両成敗。わが子の命をにとらるヽと、思へば〳〵宗岸殿。おりゃ口惜しい、口惜しいわいの」

〽の片羽のとぼ〳〵と、子に迷ひゆく小夜千鳥むざんやな半七は、今宵限りの命ぞと、三勝伴ひしを〳〵と、心にかかるわが子の顔、名残りにせめて今一目と、ともに戸口に夜の鶴。

こなたはお園がなほ涙。泣く〳〵取上げ書置を読むもはかなき世の中の

「エヽ『女はその家に在りて、定まる夫一人を頼みに思ふ者に候ところ、その頼みに思ふわれ等が身持、いつしか愛想らしき詞もかけず、ついに一度の添い伏しもなく候へども、その色目もいたさずして、夫大事、親たち大事と、辛抱に辛抱なされ候段、山々嬉しく存じまゐらせ候。エヽ今まですげなう致せしことも、さら〳〵嫌ふではなく候へども、三勝とはそもじの見えぬ先からの馴染みにて、子まで設けし仲に候へば、互ひに退き去りもなり難く、それゆゑ疎遠にうち過ぎまゐらせ候。しかし夫婦は二世と申すことも候へば、未来は必ず夫婦にて候。』ヲヽコリヤマア誠かいなあ半七様。ほんまのことでござんすかいな」

「コリヤ娘。未来は夫婦と書いてあるかい」

「アイナア、未来は夫婦、と書いてござんす」

「ヲヽそれはマア、われが為にいつち良いことが書いてあるなあ。アヽ未来は未来ぢやが、せめて一日なりとこの世で女夫にしてやりたい。なんとしてもマアこの半七は善右衛門を殺しましたぞ。ドレ〳〵娘。もちつとぢや。おれが代つて読みませうかい」

「イエ〳〵私に読まして下さんせ」

「ハテさて、おれが代わって読ませと言うに」

「イエ〳〵私が読まして下さんせ」

「これはしたり片意地な。こっちへおこせと言うに」

「イエ〳〵、私が読みますわいなあ」

「アヽこれいなう、コレ、そのやうに引張ると破れるがな。エヽ『とかく不孝のわれ等に候へども、死後にはさぞやお二人や、宗岸様の御歎き、随分々々力をつけ、この身に代つて御孝行になされ給はるべく候。申残したき事どもは数々に候へども、涙にも見へがたく、あら〳〵惜しき筆とめ申し候、ただ〳〵お通が事のみ頼み上げ候。この上はなからぬ後のお念仏、南無阿弥陀仏』、南無阿弥陀仏〳〵〳〵」

と読みも終らず宗岸親子。また伏し沈めば、半兵衛夫婦、お通を中に抱き上げ

「の顔が見たいと心に思へど世間の義理で、これまで逢ひも見もせなんだ。かういふことと知ったらば、顔見ぬうちがましであつたナウ婆」

「ヲイナウ愛らし盛りのこのお通、半七といつしよに暮らすなら、よい楽しみであらうもの」

「コレ婆、見やいの〳〵、なんにも知らず坊主めが、手打ちやあばゞぱつかりしてをるがなあ」

「オイノウこりや孫よ。もう父も母もないほどに今夜からこの婆といつしよに寝いよ。アヽとはいふものヽ乳もなく、今から先の寝起きにも、さぞや歎かん親々が、知らずにゐるが胴欲者。むごい心いぢらしや」

と云ふ声洩るヽ。三勝が、思はず乳房を握り締め

「乳はここにあるものを、飲ましてやりたい、顔見たい。乳が〳〵張るわいの」

と身をふるはせ駈け入らんにも関の戸に、空音もならず羽抜鳥。親は外面に血の涙。子はやすかたの安からぬ。悲しさ迫る内と外。一度に『わつ』と湧き出づる涙。浪花江泉川、小きんを汲み出すごとくなり。半七は歯を喰ひ締め

「かばかり深き御情け、是非もなやもつたいなや。不孝を赦させ給はれかし。いつまで泣いても返らぬ繰り言。親父様の御縄目、はやうほどくは身の最期。イザ〳〵急がん。さあおぢや」

と立上りしが『今生の別れにせめて御顔を』と、差覗けば、三勝も、『お通を一目』と伸び上り見れども親子へだての関。なんと千万無量の思ひ。両手を合はせ伏し拝み

「おさらば」

「さらば」

と云ふ声も歎きにうづむわが家の内、見返り、見返り死に往く。大和五条の茜染め、いま色上げし艶容。その三勝が言の葉をこヽに、写して止めけれ

**〔解　　説〕**

寛延元年（一七四八）大坂竹本座にて初演。竹田出雲・三好松洛・並木千柳の合作です。『菅原伝授手習鑑』『義経千本桜』とともに三大浄瑠璃の一つに数えられます。

　当時の幕府の検検閲から逃れるため時代を足利時代に置き換え、登場人物の名前も、浅野内匠頭を塩治判官、吉良上野介を高師直、大石内蔵助を大星由良之助に変えています。

**〔あらすじ〕**

京の祇園に身売りをしたお軽を見送った勘平のもとに舅・与市兵衛が遺体となって戻ってきます。おりしも仇討ちの同士が到着、勘平が持っていた縞の財布から、舅殺害は勘平の仕業と責められ、勘平は切腹。しかし遺体の傷が鉄砲傷ではないことから、斧定九郎の仕業と誤解が解けます。勘平は仇討ちの同士として連判状に名を連ね、血判を押して息絶えます。

**勘平腹切の段**

通り座に着けば。二人が前に両手を付き

「この度、殿の御大事に外れたるは拙者が重々の誤り、申し開かん詞もなし。何卒某が科御許しを蒙り、亡君の御年忌、諸家中諸共相勤むる様に、御両所の御取り成し、偏へに頼み奉る」

と、身をへり下り述べければ。郷右衛門取りあへず

「まづもつてその方、貯へなき浪人の身として、多くの金子御石碑料に調進せられし段、由良助殿甚だ感じ入られしが、石碑を営むは亡君の御菩提、殿に不忠不義をせしその方の金子を以て、御石碑料に用ひられんは、御尊霊の御心にも叶ふまじとあつて、ナソレ金子は封の儘相戻さるゝ」

と、詞の中より弥五郎懐中より金取り出だし、勘平が前に差し置けば、『ハツ』とばかりに気も、母は涙と諸共に

「コリヤこゝな悪人面、今といふ今、親の罰思ひ知つたか。ハイ、皆様も聞いて下さりませ。親仁殿が年寄つて後生の事は思はず、婿の為に娘を売り、金調へて戻らしやるを待ち伏せして、アヽアレあの様に殺して取つた金ぢやもの、天道様がなくば知らず、何で御用に立つものぞ。親殺しの生き盗人に罰を当てゝ下されぬは、神や仏も聞こえませぬ。あの不孝者、御前方の手に掛けて、なぶり殺しにして下され。わしや腹が立つわいの」

と、身を投げ伏して泣きゐたる。聞くに驚き両人刀追つ取つて弓手馬手に詰め掛け詰め掛け、弥五郎声を荒らげ

「ヤイ勘平、非義非道の金取つて身の科の詫びせよとは言はぬぞよ。わが様な人非人、武士の道は耳にも入るまい、親同然の舅を殺し、金を盗んだ重罪人は大身槍の田楽刺し、拙者が手料理振舞はん」

と、はつたと睨めば郷右衛門

「渇しても盗泉の水を飲まずとは義者の戒め。舅を殺し取つたる金、亡君の御用金になるべきか。生得汝が不忠不義の根性にて、調へたる金と推察あつて、突き戻されたる由良助殿の眼力、ハヽ天晴れ〳〵。さりながら、ハア情けなきはこの事世上に流布あつて、塩谷判官の家来早野勘平、非義非道を行ひしといはゞ、汝ばかりが恥ならず、亡君の御恥辱と知らざるか。こなこな、〳〵、うつけ者めが。勘平、コレサ勘平、御身はどうしたものだ。左程の事の弁へなき、汝にてはなかりしが、いかなる天魔が魅入りし」

と、鋭き眼に涙を浮かめ、事を分け理を責むれば、堪り兼ねて勘平諸肌押し脱ぎ脇差を、抜くより早く腹へぐつと突き立て

「ム、いづれもの手前面目もなき仕合はせ、拙者が望み叶はぬ時は切腹と兼ねての覚悟、わが、わが舅を殺せし事、亡君の御恥辱とあらば一通り申し開かん、両人共にまづ、〳〵〳〵、聞いてたべ。夜前弥五郎殿の御目に掛かり、別れて帰る暗紛れ、山越す猪に出合ひ、二つ玉にて撃ち留め、駆け寄つて探り見れば、猪にはあらで旅人、南無三宝誤つたり。薬はなきかと懐中を探し見れば、財布に入つたるこの金。道ならぬ事なれども、天より我に与ふる金とすぐに馳せ行き、弥五郎殿にかの金を渡し、立ち帰つて様子を聞けば、撃ち止めたるは、撃ち止めたるは、わが舅。金は女房を売つた金、か程迄する事なす事、いすかの程違ふといふも、武運に尽きたる勘平が、身の成り行き推量あれ」

と、血走る眼に無念の涙。子細を聞くより弥五郎ずんど立ち上り、死骸引き上げ打返し、『ムウ、ム』と疵口改め

「郷右衛門殿これ見られよ、鉄砲疵には似たれどもこれは刀で抉つた疵。勘平早まりし」

と、言ふに手負も見てびつくり、母も驚くばかりなり。郷右衛門心付き

「イヤコレ千崎殿、アヽこれにて思ひ当つたり。御自分も見られし通り、これへ来る道端に鉄砲受けたる旅人の死骸、立ち寄り見れば斧定九郎。強欲な親九太夫さへ、見限つて勘当したる悪党者。身の佇みなき故に、山賊すると聞いたるが、疑ひもなく勘平が、舅を討つたは彼奴が」

「エヽ、そんなりやアノ親仁殿を殺したは、他の者でござりますか。ハア」

『ハツ』と母は手負に縋り

「コレ、手を合はして拝んます。年寄りの愚痴な心から恨み言ふたは皆誤り、堪へて下され勘平殿、必ず死んで下さるな」

と泣き詫ぶれば、顔振り上げ

「只今、母の疑ひもわが悪名も晴れたれば、これを冥途の思ひ出とし、後より追付き舅殿、死出三途を伴はん」

と、突込む刀引廻せば

「アヽ暫く〳〵。思はずもその方が舅の敵討つたるは、未だ武運に尽きざるところ。弓矢神の御恵みにて、一功立つたる勘平、息のあるうち郷右衛門が、密かに見する物あり」

と、懐中より一巻を取り出だし、さらさらと押し開き

「この度、亡君の敵高師直を討ち取らんと神文を取り交し、一味徒党の連判かくの如し」

と、読みも終らず苦痛の勘平

「シテその姓名は、誰々なるぞ」

「オヽ徒党の人数は四十五人、汝が心底見届けたれば、その方を差し加へ一味の義士四十六人。これを冥途の土産にせよ」

と、懐中の矢立取り出だし姓名を書き記し

「勘平、血判」

「オヽ心得たり」

と、腹十文字に掻き切り、臓腑を掴んでしつかと押し

「サ血判、仕つた」

「アヽコリヤ乗るな、〳〵。早野勘平繁氏、確かに血判相済んだぞ」

「チエヽ忝なや有難や。わが望み達したり。母人、嘆いて下さるな。舅の最期も女房の奉公も、反古にはならぬこの金、一味徒党の御用金」

と、言ふに母も涙ながら、財布と共に二包み、二人が前に差し出だし

「勘平殿の魂の入つたこの財布、婿殿ぢやと思うて敵討の御供に連れてござつて下さりませ」

「オヽ成程、尤もなり」

と、郷右衛門金取り納め

「思へば〳〵この金は、縞の財布の黄金、仏果を得よ」

と言ひければ

「ヤア仏果とは穢らはし、死なぬ死なぬ。魂魄この土に留まつて、敵討ちの御供する」

と、言ふ声も早四苦八苦、『惜しや不憫』と両人が、浮む涙の玉の緒も、切れてはかなくなりにけり

「ヤア〳〵、〳〵、もう婿殿は死なしやつたか。さても〳〵世の中に、俺が様な因果な者が又と一人あらうか。親仁殿は死なつしやる、頼みに思ふ婿を先立て、いとし可愛いの娘には生き別れ、年寄つたこの母が一人残つてこれがマア、何と生きてゐられうぞ。コレ親仁殿、与市兵衛殿、俺も一緒に連れて往て下され」

と、取り付いては泣き叫び、また立ち上つて

「アヽコレ婿殿、母も共に」

と、縋り付いては伏し沈み、あちらでは泣きこちらでは『わつ』とばかりにどうど伏し、声をはかりに嘆きしは、目も当てられぬ次第なり。郷右衛門突立ち上がり

「これ〳〵老母、嘆かるゝは理りなれども、勘平が最期の様子、大星殿に詳しく語り、入用金手渡しせば満足あらん。首に掛けたるこの金は、婿と舅の。四十九日や五十両、合はせて百両百ケ日の追善供養、後懇ろに弔はれよ。さらば、さらば」

「おさらば」

と、見送る涙見返る涙、涙の浪の立ち帰る、人もはかなき次第なり

**〔解　　説〕**

宝暦九年(一七五九)大阪竹本座初演。竹田小出雲、近松半二、北窓俊一、竹本三郎兵衛、二歩堂の合作。

**〔あらすじ〕**

病弱な朱雀天皇は、弟の桜木親王に帝位を譲ろうとしたため、親王は左大臣藤原忠文に迫害を受けることとなります。忠文側の追っ手を逃れ、親王は、山伏安珍(あんちん)となり、紀州の真那古庄司(まなごのしょうじ)のもとにやってきました。庄司の娘清姫(きよひめ)は、かつて都で親王を見初め、恋心を抱いていました。しかし親王には、おだ巻姫という恋人がおり、二人は、忠文の一味、鹿瀬十太(かせのじゅうた)の手を逃れ、道成寺へと向かいます。清姫は僧、剛寂(ごうじゃく)にたきつけられ、嫉妬のあまり逆上して二人の後を追います。日高川にたどりついた清姫は、渡し守に舟を出すように頼みますが、渡し守が拒むと、その姿は蛇体に変化し、川を渡っていくのでした。

**渡し場の段**

こゝは紀の国日高川、清き流れも清姫が、松吹く風に誘はれて、只さへいとゞ物凄し。女心の一筋にもあらはにやう〳〵と、日高の川をここかしこ

「安珍さまいなう〳〵、わが夫なう」

と駆け廻り、呼べど叫べど松風の他に答ゆるものもなし。はや山の端にさし昇る隈なき夜半の月影は、昼を欺く如くなり。かすかに見ゆる川岸の、もやひし舟に

「ハア嬉しや、ここは日高の渡し場、これを越ゆれば道成寺へ間もなし、渡り頼まん急がん」

と川のに立ち寄って

「なうその舟早う渡してたべ、渡し守どの〳〵いなう、コレなう〳〵」

と呼ぶ声も枯野の秋の舟ならで、渡りかねるぞ甲斐もなき。寝耳にふっと舟長は押しのけて仏頂面

「エヽ何ぢゃ、しいわい。夜夜中がや〳〵と、『早う〳〵』のその声で、あったら夢を取り逃がしたわい。夜が明けたら渡してやらう、エヽコレマアよう寝ている者を、あた鈍くさい」

とつかうどに顔をしかめてつぶやけば

「なう自らは道成寺へ急ぐ者、早うこゝを渡してたべ、サ早う〳〵」

「エエ何ぢゃ、汁が食ひたい、アハヽヽヽ、テモいやしい奴ぢゃなあ、ハヽア聞えた、コリャ何ぢゃな、宵に渡した山伏殿の後追うてきた女子ぢゃな、エヽそれなればなほ渡されぬ、ならぬ〳〵」

にべもなき、詞に姫は涙声

「エヽそりゃ胴欲ぢゃ〳〵〳〵わいなう。親の許したわが夫を他所の女子に寝取られて、何とこの儘帰られう、不憫と思うて渡してたべ、慈悲ぢゃ情ぢゃ、聞き分けて」

と頼みつかこちつ手を合わせ、嘆き沈むぞ哀れなり。こなたはなほも空吹く風

「ムヽそれほどに頼むなら渡してやらう、と言うたらよからうが、マアいやぢゃ。おりゃあの山状に縁もなし、またもなけれど、渡されぬといふ訳を耳をさらへてマよう聞けよ。かの山状殿の頼みには『かう〳〵した女が来たら必ず渡してくれるな』とコレ、貰ふて頼まれた。寒気をしのぐ山吹の八重か一重か板一枚、下は地獄のこの、頼まれたれば男づく、いっかな渡さぬ、マアならぬ。われもまたどれほどに焦がれても及ばぬ恋ぢゃ、役にも立たぬ顎きかずと、足元の明るい内とっとと去ね〳〵。エヽうぢ〳〵とうぢついて棹の馳走を食らふか」

と慈悲も情けもなか〳〵に渡す気色もなかりける。姫はあるにもあらればこそ

「エヽ聞こえませぬ〳〵安珍さま。恨みはこっちにあるものを、却ってこの身に恥かかされ、何と永らへゐられうぞいなう。今日とても父上の御意見、ごもっともとは思へども、女は一度わが夫と思ひこんだらいかなこと、例へ地獄へ落ちるとも可愛いという輪廻は離れず、まして五月の宮詣でにふっと見染めしその日より、愛し床しい恋しいとにも忘れかね、れ焦るゝ恋人に逢ふて嬉しい言の葉を、語らふ間さへ情なや。恋の呵責に砕かれて身は煩悩に繋がるゝ、の氷、大焦熱、阿鼻修羅地獄へ落つるとも、思ひ切られぬ安珍さま、聞えぬわいな」

と身をもだへ『わっ』とばかりに声を上げ、嘆く涙の雨車軸、その名も高き紀の国や、日高の川に水増して堤も穿つごとくなり、泣く目も払ひすっくと立ち

「エヽましや腹立ちや、思ふ男を寝取られし恨みは誰に報ふべき、例へこの身は川水の底の藻屑となるとても、憎しと思ふ一念のやはか晴らさで置くべきか」

と心を定め身繕ひ、川辺に立ちより水の面写す姿は大蛇の有様。舟長見るよりわなゝき声

「鬼になった、蛇になった、角が生えた、毛が生えた、食殺されては叶はじ」

と跡をも見ずして一散に、飛ぶが如くに逃げてゆく

「さては悋気嫉妬の執着心、邪心執念いやまさり、我は蛇体となりしよな。もはや添はれぬこの身の上、無間奈落へ沈まば沈め、恨みを言ふて言い破り、取り殺さいでおかうか」

と怒りの、歯を噛み鳴らし、あたりを睨んで火焔を吹き岸の蛇籠もどう〳〵と青みきったる水の面、ざんぶとこそは飛び入ったり。不思議や立浪逆巻きて、憤怒の大頭角振立て、髪も逆立て浪がしら、抜手をきって渡りしは怪しかりける

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。